

申樂の物まね

土田龍太郎

今の世の人、物まねといへばをまね稚きものに思ひおとしめ、代りてややもすれば象徴の二文字を好み用ゐるはいかなるゆゑにやあらむ。象徴もしは表章または寓喩などといへる名辭は、もとより西の方なる外そとつ國のものの辨わきまへ出せるものなれば、わが國人の學藝を考へむには、たえてえうなしとまでこそは言ふまじけれ、ただに關かかる例ためしとしてはまれなれば、これらを見だりに用ゐることあしからずやはあるべき。おほかた近き世の物知り人、あだし國のことわりをのみ仰ぎまねぶを習ひとすれば、

物まねと言はであるべからざるときに物まねを言ふをいとひ象徴と言ひかへてしたりがほなるは、心あさきさかしらごとなれど、これ象徴と言へば、品高きものに思ひなし、物まねといへば位劣れるものに思ひ下せるにほかなければいともうれたきわざになむある。

かの觀世大夫秦元清のものせる申樂傳書今にあまた遺れども、ことに名に立てるは、この大夫の四十路近きころに著せりとおぼしき風姿花傳の一書にて、本朝の藝能を嗜むともがらの賞で尊ぶことひとかたならぬは、ここにて世阿の説けりしくさぐさのことわりの中に、祕傳奧義とおぼしきものさへそこらうちまじれるによれるなるべし。

おほよそ申樂能の舞と所作の肝要と言ひつべきは物まねの一事にて、この傳書の内にも物まねに言ひ及べるところ少からず。

ものまねび
物學の條々を教ふるに先立ちて世阿の曰く

物まねの品々筆に盡し難し。さりながら、この道の肝要なれば、その品々をいかにも嗜むべし。およそ何事をも残らずよく似せんが本意なり。しかれどもまた事によりて濃き淡きを知るべし。

かく云ひて後、物狂法師老人女人などの似せやうを説くこと、おのおのにつきていとも詳らかなり。げに物まねに品々ありて數へつくしがたければ、その品の別るにしたがひて工夫の必ず同じからぬはさることなれども、ここにて、何事をも残らずよく似せんが本意なりと云へるによくよく心をつけではあるべからず。

かくひたみちに物に似すべきことを説けるとはうらうへのごとくなれども、同じ世阿のあながちに物に似せむとばかりすまじきことを教ふるところはたなきにあらざるは、讀むに思ひのほかの心地すれば、げにおもしろしと云はではあるべき。別紙口傳の内に曰く物まねに似せぬ位あるべし。物まねを極めてその物にまことに成り入りぬれば似せ

んと思ふ心なし。

ここにてはむねと古い人に似せむときの心掟を述べてねもころなれども、物まねを極めむとすればつひには物まねをこゆる位に至るべきことを訓まじしつつ、あながちに似せむとのみ心うべからざるを説けるやう玄妙これにすぐるものあるまじとぞおぼゆるなる。年ごろただひたぶるに物まねのいさをつめりしそのはてに、おのづからあらはるるくすしきはたらきあり。そのはたらきにおのが身をさながらゆだねることなくては、花といひ幽玄といふたへなるさかひにはさらに及びがたかるべし。物まねといへばうはべは浅げに聞え、象徴と記せば文字づらばかりはことわり深げに見ゆらめども、かかるさかしらめきたる方になづみては風雅のまことにふれむことも望みがたし。されば世阿が物まねと云ふときは、異ごとならずただすなほに物に似せむとばかり心得ればことたりぬべくして、そこにいささかもわたくしのさかしらを加ふべからず。

一子相傳とて長く世に出でざりし祕書、その道の奥に至れりし堪能のものならではえ悟り辨わかふまじきところ少からぬはさるものにて、いまだ堂にも入らぬわがごときものの右に述べたりしやういともくだくだしけれども、まことはただかいなではなかしごとにすぎざれば、心あらむ人の見ばいかばかりあざけらむも知られず。そはともかくもあれ、申樂能のかなめとなれるは物まねにほかならず、またこの物まねをなまじひに象徴と言ひ代ふまじきことばかりは疑ひなかるべし。

申樂のみにかぎらず、和歌連歌作庭などにもわたりてわが國人の風雅を廣く考へむに、物まねにならびてなほざりに思ふまじきものあり。そは移しと見立てなれどもこれらにつきて鄙見を述べむついでまたほかにありもやせむと望まるるぞかし。

(令和二年八月二十七日受附)